豊中市

岡町北遺跡

—第3次調査—

1993年

六甲山麓遺跡調査会

豊中市

岡町北遺跡

—第3次調査—

1993年

六甲山麓遺跡調査会

巻頭図版　遺跡周辺垂直写真

序　　文

92年9月中旬、炎暑のなごりの陽射しのもとで、ひさしぶりに現場に立った。案に相違して、予定建築物はまだみられず、全面アスファルト舗装の駐車場となり、西の道路寄り中央に、事務所に用いられたらしい仮設建物があるのみであった。あるいはバブル経済崩壊の影響を受けたのかとも一瞬思ったが、もとより定かではない。いずれにしても、アスファルトの下にはまだ発掘したばかりの主要遺構が残されているようだ。

近世の在郷町であった岡町の西方にひらかれた閑静な住宅地は、世代交替が建物老朽化にともない、近年急速に現代建築の町へと変貌しつつある。私たちが発掘調査するにいたったこの敷地も、南庭に池のあった木造住宅の撤去後の調査であった。

ところで、かつて昭和30年代に『豊中市史』がまとめられた頃は、まだ田園都市といった観であったが、いまは市域の大半が住宅で占められている。当時知られていた市内の遺跡分布と現在の遺跡分布をくらべると、格段の増加である。それも遺跡の数というよりも、まさしく大幅な面的増加である。この間の豊中市教育委員会による丹念な調査の成果であり、多くは、住宅開発に伴うこのたびのような比較的小面積の調査によるものである。したがって遺跡の検出には、土地所有者をはじめとする多くの関係者の理解と協力によるところが大きいといえよう。

豊中丘陵の緩やかに北から南へくだる台地面の上、西縁に近く検出されたこの遺跡は、東方一帯に大石塚・小石塚古墳をはじめとする桜塚古墳群がひかえている注目すべき地域にある。この遺跡は、いったん浅い谷を間にして西にひろがる山の上遺跡に包摂されようとしたが、調査を担当した私たちの意見によって、あらためて岡町北遺跡の一部として把握されることになった。ちなみに両遺跡とも『豊中市史』にはまだ現れていなかった。

このたびは、かぎられた空間の調査であったが、それにもかかわらず、予想以上に顕著な遺跡を検出できた。弥生時代中期後半の竪穴式住居跡3棟にくわえて、後世の掘立柱建物1棟であり、遺構はさらに周囲へ拡がっていると考えられる。ひきつづいて、この地区の精査が必要であることも明らかとなった。

以上の成果を念頭におきつつ、末尾ながら、調査に際してさまざまな便宜をはからっていただいた関係者各位にあらためて深謝する。

六甲山麓遺跡調査会
代表　橋本　久

凡　　例

1．本書は六甲山麓遺跡調査会が株式会社長谷工コーポレーションの委託を受けて実施した大阪府豊中市に所在する岡町北遺跡第３次調査報告書である。

2．調査は橋本　久を調査団長とし、浅岡俊夫を主任調査員に1990年９月10日から10月31日まで実施した。調査にあたって、伊井孝雄氏に調査委員として参加いただいた。

3．調査に際して、豊中市教育委員会社会教育課の奥田至蔵・柳本照男・服部聡志三氏から指導・助言を得た。また、株式会社長谷工コーポレーション大阪ディベロッパー事業部の野秋和之・古久保行男両氏をはじめとする担当者各位から種々協力を賜った。

4．発掘調査・整理作業の過程で下記の方々から協力・助言をいただいた。記して感謝の意を表したい（50音順）。

　葛野　豊（県立尼崎南高校）、宮川禎一（辰馬考古資料館）、宮本長二郎（文化庁建造物課）、宮本　博（兵庫県立図書館）、山崎貞治（大阪教育大学）

5．遺構の空測図化は、写測エンジニアリング株式会社が行った。

6．本書を作成するにあたって、出土遺物のうち土器類については当調査会の古川久雄が測図・製図を担当し、石器類については宮川禎一氏に測図・製図を依頼した。

7．遺構と石器類の写真撮影は浅岡が行い、土器類は楠本真紀子氏に依頼した。

8．石器類の石材については、山崎貞治氏の鑑定教示を得た。

9．本書の編集、本文の執筆は橋本・古川の協力を得て、浅岡が行った。

10．発掘調査の実測図・写真および遺物は一般の利用に供するよう豊中市教育委員会に移管している。広く活用されることを希望する。

岡町北遺跡—第3次調査—

本 文 目 次

I　遺跡の位置と環境 …… 1

1．地理的環境 …… 1

2．歴史的環境 …… 1

II　調査の経過 …… 7

1．調査に至る経過 …… 7

2．発掘調査組織 …… 7

3．調査の経過 …… 10

III　調査の概要 …… 12

1．土　　層 …… 12

2．遺構と遺物 …… 12

(1)建物遺構 …… 12

(2)ピットと土坑 …… 20

(3)その他 …… 22

IV　まとめ …… 23

図・表目次

図1　豊中台地周辺の地形……2
図2　遺跡の位置と周辺の遺跡……3
図3　SA-3出土遺物取上げ風景……6
図4　遺跡の位置……8
図5　調査地とその周辺……9
図6　発掘調査区遺構配置図……11
図7　SA-1平面・断面図……13
図8　SA-2平面・断面図……14
図9　SA-3平面・断面図……15
図10　SA-3出土の土器……16
図11　SA-3出土の石器類……17
図12　SB-1平面・断面図……19
図13　SP-5、SP-152、SP-2、SP-10、SP-27、SB-1、SA-1、SA-2、SP-26、その他出土遺物……21
図14　SA-1拡張後の状況写真……24

表1　周辺の遺跡地名表……5

図版目次

巻頭図版　遺跡周辺垂直写真
図版1（上）発掘調査区全景
（下）SA-1発掘状況
2（上）SA-3遺物出土状況
（下）SA-3完掘状況
3（上）SA-2発掘状況
（下）SB-1完掘状況
図版4　SA-3出土遺物
5　SP-5・SA-3出土遺物
6（上）SA-3出土遺物
（下）SP-5・26・2・27、SB-1、落ち込み出土遺物

Ⅰ　遺跡の位置と環境

1．地理的環境

豊中市は旧豊島郡の中心として開けたところで、文字が示すごとく豊島の真ん中という意味から「豊中」と命名されたものである。豊中市は北摂丘陵から流れ出た猪名川下流の左岸に位置し、その西辺は兵庫県と境を接する。北部に千里丘陵をひかえ、中央部に豊中台地、西・南部に西摂平野が広がり、住環境に適した地勢をもつと共に、商業都市大阪に近いこと、さらに近年、飛行機の需要が高まる中で大阪国際空港の玄関口であることもあって、大阪の衛星都市として飛躍的に発展してきた。

岡町北遺跡は、阪急岡町駅の西350ｍの豊中市岡町北２丁目44に位置し、豊中台地の一角に立地する。豊中台地は、千里川と天竺川の間に舌状に張り出した標高20ｍ～40ｍのなだらかな洪積丘陵台地で、藤田和夫・前田保夫らはその中を中位段丘と低位段丘に色分けしている。[(1)] 藤田らの成果は、現在の改変された地形から線引きされたものであり、細かいところまではわからないが、それをもとに明治18年の陸測図に重ね合せたのが図１である。これを見ると、台地の東側の等高線がより密に込んだ部分が中位段丘面にあたり、台地西側の等高線が希薄なところが低位段丘面となる。また、台地の先端には小さな開析谷が幾条も食い込まれていたことがわかる。低位段丘部では山ノ上村（現山ノ上町）の両側に比較的大きな開析谷が見られ、その東側のは南北に深く森木村まで達している。現在は谷底に沿って二車線の道路がつけられているが、その両側に名残が見られる。遺跡はこの開析谷の左岸、標高18ｍほどの台地低位段丘の先端に立地しているため、直接西摂平野には面していない。発掘調査地の東数十ｍのところには低位段丘と中位段丘との境界線が走るところがあり、調査地の東170ｍにある史跡大石塚・小石塚古墳は中位段丘面に立地する。低位段丘と中位段丘の境界あたりに遺跡の東限が考えられるかも知れない。

2．歴史的環境

岡町北遺跡が立地する豊中台地を中心に概観する。

旧石器～縄文時代の遺跡は、千里川流域を中心に発見されている。ナイフ形石器を出した柴原、螢池西遺跡や、縄文時代中期の野畑春日町遺跡、中期末から後期にかけての野畑遺跡などがよく知られている。これらの遺跡のあり方は、千里川を中心とした千里丘陵・豊中台地が当時の生業の場であったことを物語っている。

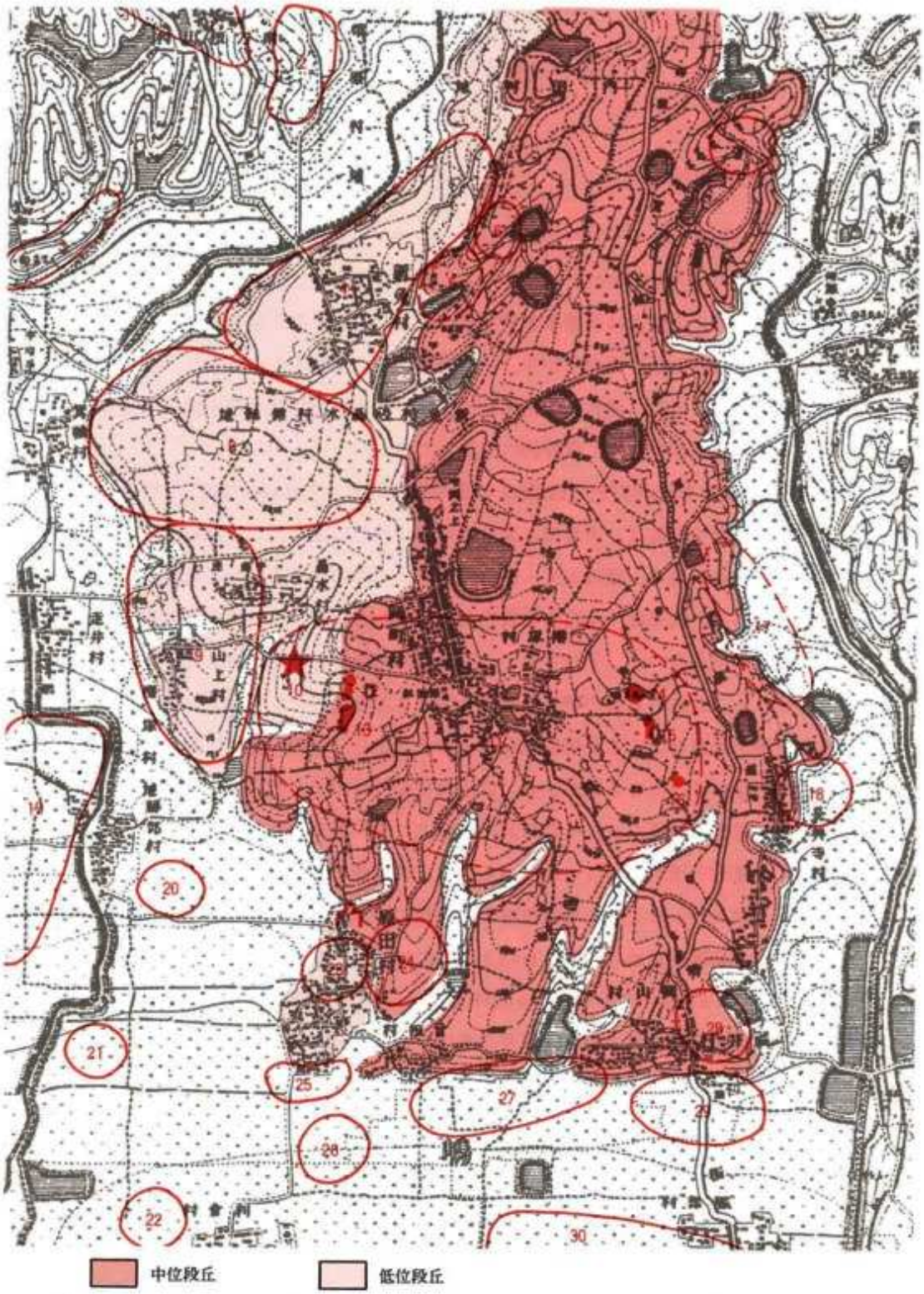


図1　豊中台地周辺の地形（明治18年陸測図を1/25,000に縮少）

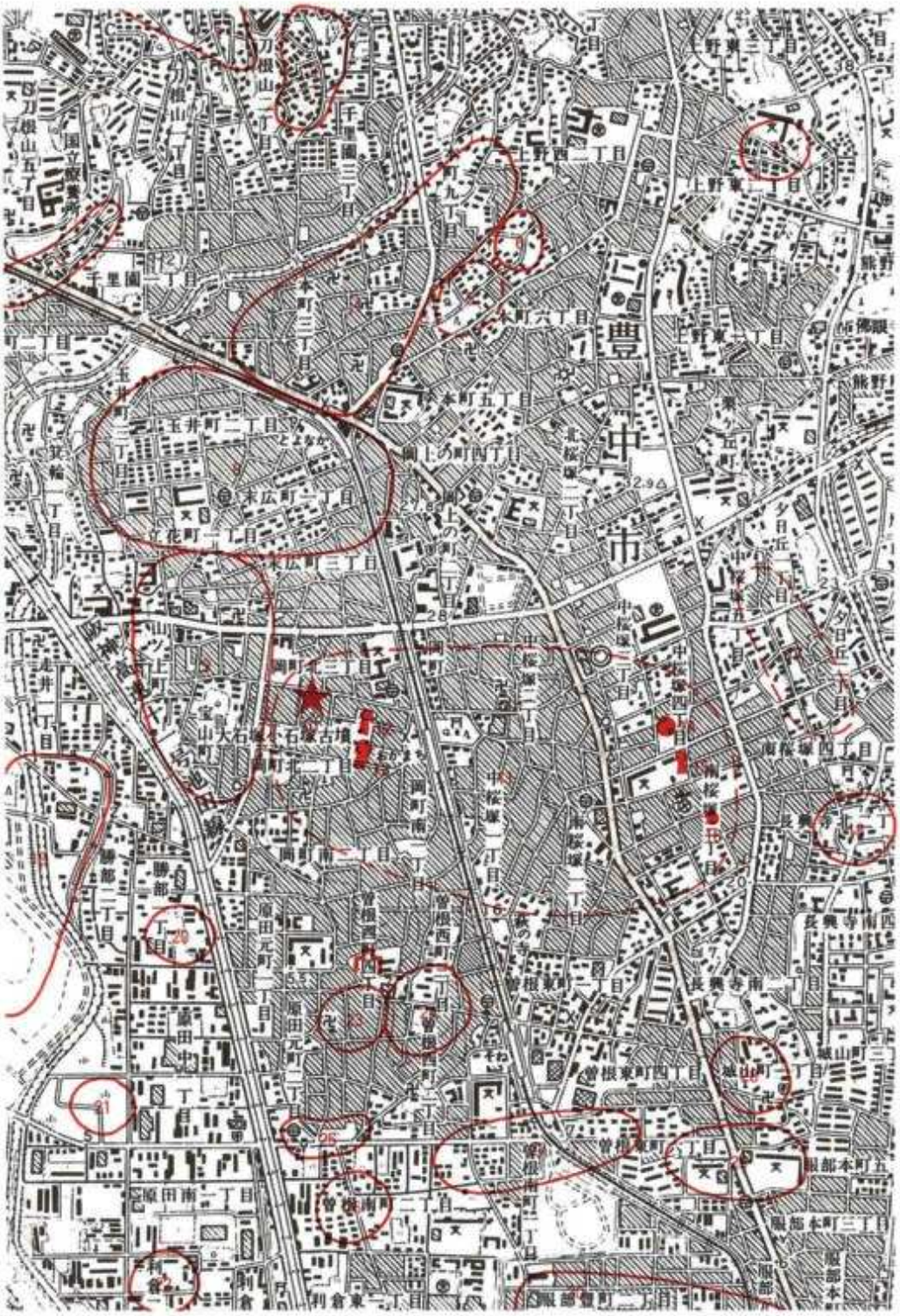


図2　遺跡の位置と周辺の遺跡（1/25,000）

弥生時代になると稲作農業が伝来し、稲作に適した沖積平野の低地に集落が構えられるようになり、木棺墓が発掘された勝部遺跡などが猪名川流域に形成される。また、集落の場が豊中台地にまで拡大され、平野に面した台地先端部に新免・山ノ上遺跡が出現する。そして、豊中台地のほぼ中央、岡町駅東側すぐにある原田神社から外縁付鈕式銅鐸が2口出土しているように、弥生時代を通して生活の場は台地の奥深く広がっていった。

古墳時代には、西摂平野を見下ろす丘陵や台地上に前方後円墳を主体に前期古墳が築かれる。豊中台地の中央部でも前期末から中期にかけて大型古墳が築かれ、桜塚古墳群が形成される。明治の頃、同古墳群には36基の古墳が残っていたようであるが、いまでは大塚・御獅子塚・南天平塚・大石塚・小石塚の5基を数えるにすぎない。後期には新免宮山古墳群が台地の丘陵部に形成され、最近では新免遺跡からも後期古墳の存在が数基確認されてきている。また、新免遺跡の一角に桜井谷古窯址群で焼かれた須恵器を集積した場所も発掘されるなど、古墳時代、この地区は政治的にも経済的にも重要な拠点として開けていたことはまちがいあるまい。

6世紀代に操業を始めた桜井谷古窯址群は、奈良時代まで継続して活動を続け、仏教普及にともない地方寺院建立の気運が高まると瓦生産にも従事している。白鳳時代、新免の地にも金寺山廃寺（新免廃寺）が建立されるが、ここで使われた瓦が焼かれたのであろう。また、山ノ上遺跡では梵字瓦をもつ平安時代後期の寺院跡も見つかっている。このように、弥生時代、豊中台地上に形成された新免・山ノ上遺跡などの集落遺跡は、その後、絶えることなく綿々と継続して営まれ続け、各時代の人々の動きを垣間見ることのできる一級の遺跡として注目されている。

最後に、古代における豊中台地上の遺跡の立地のあり方を見てみよう。台地上の主要な遺跡として、新免・山ノ上・本町遺跡などの集落遺跡、古墳時代前期～中期の大型古墳で構成される桜塚古墳群、金寺山廃寺などがあげられる。こうした遺跡のうち新免遺跡などの集落遺跡は低位段丘面に立地し、その広がりは低位段丘全体におよんではいるものの、中位段丘にはおよんでいない。しかし、桜塚古墳群の大型古墳をはじめ、後期の新免宮山古墳群や寺院跡などのような一般民衆の生活とは関係ない記念碑的構築物は中位段丘面に立地しているのである。平野に面し、起伏が少なくなだらかな場所に集落が営まれており、土地利用をめぐってかなり厳密な使い分けがなされていたのではなかろうか。古代人の生活の知恵を読み取ることができる。今後、新たな遺跡発見があるかも知れないが、一般集落遺跡は低位段丘あるいは中位段丘の先端に立地するという傾向に大きな変化はないであろう。

註 (1) 藤田和夫・前田保夫『第一章　伊丹の地質構成』『伊丹市史』第一巻　1971

表1　周辺の遺跡地名表　　（番号は図2に一致）

番号	遺跡名	種類	内容	時代	文献
1	待兼山遺跡	集落・古墳	高地性集落、古墳跡	弥生～近世	
2	柴原遺跡	集落	ナイフ形石器	旧石器～奈良	⑫
3	南刀根山遺跡	集落	壺棺	弥生後期	
4	本町遺跡	集落	竪穴住居跡　掘立柱建物跡	弥生～平安	⑭⑮⑰
5	新免宮山古墳群	古墳群	横穴式石室墳・陶棺	古墳後期	
6	金寺山廃寺	寺院跡	軒丸瓦・軒平瓦　塔心礎	白鳳～奈良	①
7	上野遺跡			縄文	
8	新免遺跡	集落	竪穴住居跡　方形周溝墓　古墳跡	縄文～中世	⑩⑪⑫⑬⑭
9	山ノ上遺跡	集落	竪穴住居跡　掘立柱建物跡　寺院跡	弥生～中世	⑩⑫⑬
10	**岡町北遺跡**	**集落**	**竪穴住居址　掘立柱建物跡**	**弥生中期～**	**本報告**
11	桜塚古墳群	古墳群	もと36基存在したといわれる	古墳前・中期	
12	小石塚古墳	古墳	前方後円墳　全長49m	古墳前期	④⑮⑯
13	大石塚古墳	古墳	前方後円墳　全長87m	古墳前期	④⑰
14	大塚古墳	古墳	円墳　直径56m	古墳中期	⑨⑩
15	御獅子塚古墳	古墳	前方後円墳　全長55m	古墳中期	⑬
16	南天平塚古墳	古墳	帆立貝式古墳　全長28m	古墳中期	②
17	下原窯跡群	窯跡			
18	長興寺遺跡				
19	勝部遺跡	集落	木棺墓　甕棺墓　掘立柱建物跡	弥生～平安	③
20	勝部東遺跡				
21	原田中町遺跡				
22	利倉北遺跡				
23	原田遺跡	集落			
24	曽根遺跡	集落	竪穴住居跡	弥生後期	
25	原田元町遺跡				
26	曽根南遺跡				
27	豊島北遺跡				
28	城山遺跡				
29	服部遺跡	集落	土壙　井戸	弥生　中世	⑦
30	穂積遺跡	集落	円形古墳跡	縄文～	

主要文献

①石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』1936

②小林行雄「大阪府豊中南天平塚の発掘」『考古学』8－9　1937

③豊中市教育委員会『勝部遺跡』1972

④豊中市教育委員会『史跡大石塚・小石塚―保存事業に伴う調査報告』1980

⑤大阪大学待兼山遺跡発掘調査団『待兼山遺跡』1984

⑥大阪大学埋蔵文化財調査委員会『待兼山遺跡　II』1988

⑦服部遺跡発掘調査団　『服部遺跡発掘調査報告書』1986

⑧豊中市教育委員会『新免遺跡・第11次発掘調査報告書』1987

⑨豊中市教育委員会『摂津豊中大塚古墳』1987

⑩豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』1982年度

⑪豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』1983年度

⑫豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』1984年度

⑬豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』1985年度

⑭豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』1986年度

⑮豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』1987年度

⑯豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』1988年度

⑰豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』1990年度

図3
SA－3出土遺物
取上げ風景

II　調査の経過

1．調査に至る経過

当該地は桜塚古墳群の西端の一角に位置し、その東側100mのところには史跡大石塚・小石塚古墳が存在するものの、集落遺跡は未確認であった。そのため、このたびの開発事業計画に際し、市教育委員会は試掘調査を行った上で、その取り扱いを決定されることとなった。1990年7月5日、敷地の長辺に沿って平行に2本のトレンチが設定され、試掘調査が行われた。その結果、地表下30～50cmに地山面が拡がり、1本のトレンチから弥生時代の竪穴住居址らしい方形の落ち込みの一端とピットが検出され、発掘調査の必要性が説かれたのである。

これを受けて、事業主である長谷工コーポレーション株式会社は調査時期等を市教育委員会と打ち合わせたが、着手が1年以上先になるということで折り合いがつかず、当調査会に発掘調査の依頼をしてきた。そこで、遺跡の内容等を市教育委員会に確認し、調査面積・調査期間などについて協議したうえ、発掘調査を受けることとした。

1990年8月4日、文化財保護法第57条第1項の規定にもとづき、埋蔵文化財発掘調査届出書を提出するとともに、埋蔵文化財調査に関する協定書を市教育委員会・長谷工コーポレーション・当調査会の三者において締結した。これにより、9月10日から発掘調査を開始した。

2．発掘調査組織

発掘調査および整理作業の担当者ならびに参加者は次のとおりである。

調査団長	橋本　久
主任調査員	浅岡俊夫
調査委員	伊井孝雄（元大阪教育大学付属高等学校教頭）
調査員	西村美紀・磯辺敦子・古川久雄
補助員	中村信義・岸川茂美・重川一代・前田はるみ・藤井民子
遺物写真撮影	楠本真紀子
事務担当	八木明美
作業員	株式会社染の川組
航空写真撮影	写測エンジニアリング株式会社

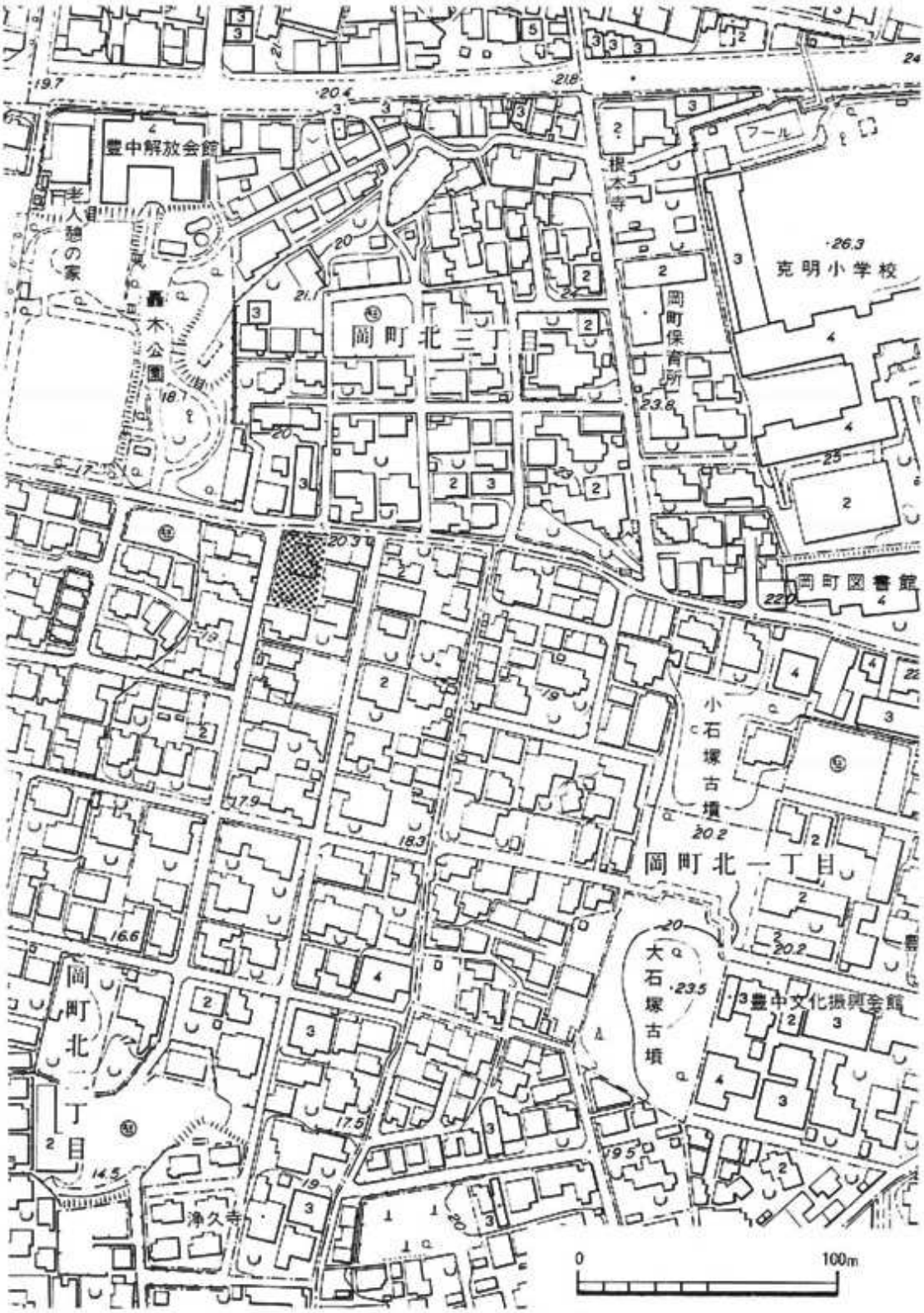


図4　遺跡の位置（1/2500）

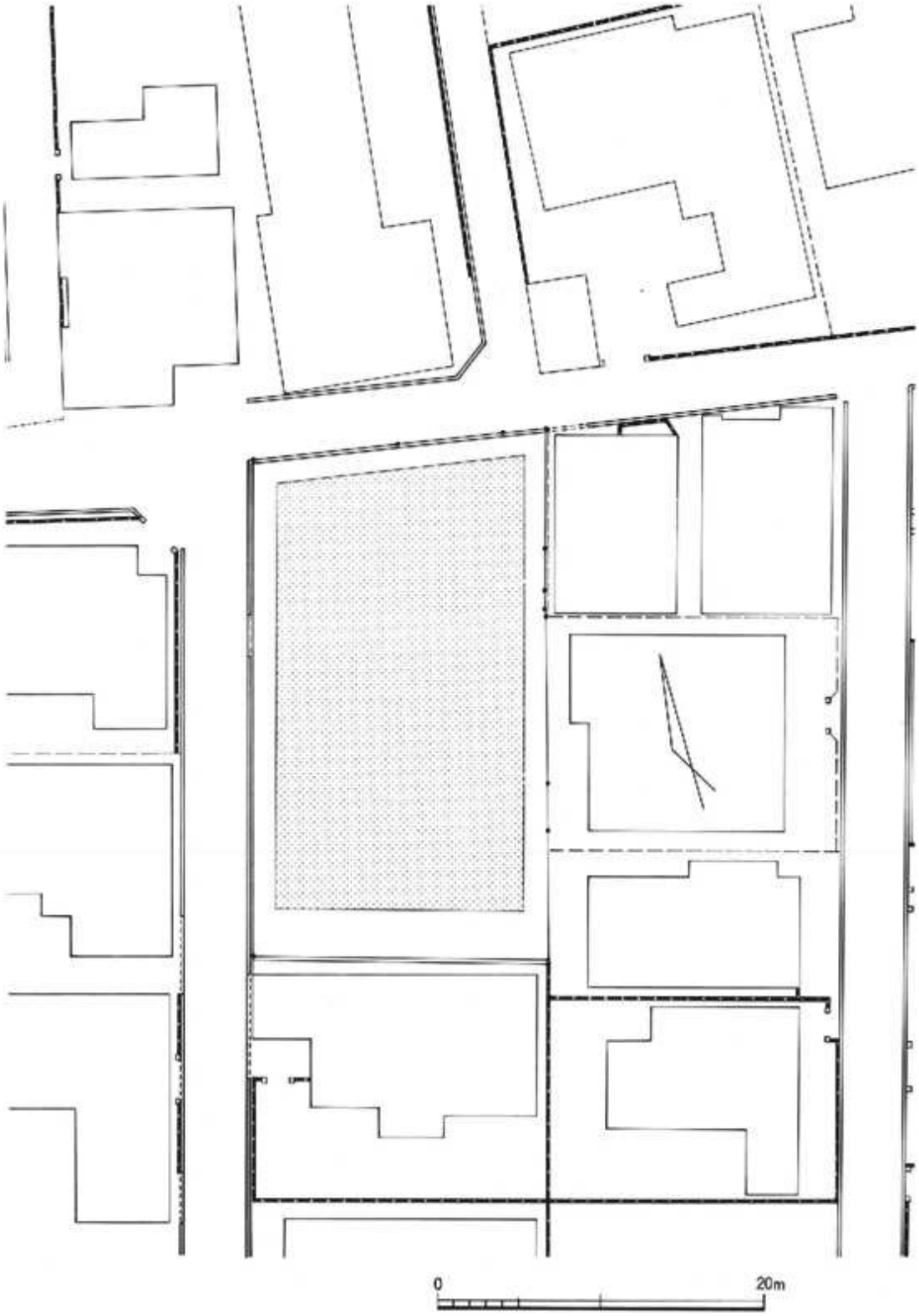


図5　調査地とその周辺

3．調査の経過

敷地は南北32m・東西18mほどのやや台形状を呈した長方形の土地で、面積は約571m²である。当該地の西には小支谷が南北に開析されており、遺跡はそれに面した台地端部に立地しているため、調査地はわずかに西下がりの地形になっている。

調査は敷地に沿って南北15m・東西27m、面積約400m²を発掘し、国家座標（第6系）にしたがって5m方眼を設定し、北西隅から東西にＡＢＣ…、南北に１２３…の番号を付した。因に、B－2＝X－135.505・Y－49.065、D－7＝X－135.530・Y－49.055となる。現地調査は1990年9月10日から同年10月31日まで実施した。つぎに経過を簡単にたどっておく。

9月10～11日　豊中市教育委員会柳本照男氏立会により発掘調査開始。表土・撹乱土等機械掘削。残土搬出。壁面清掃。

12～14日　地山面精査、遺構検出作業開始。撹乱坑掘削。

17～19日　台風の為作業中止。

20～27日　地山面精査継続。撹乱坑掘削。遺構平面実測（1/20）開始。

29日　南壁土層断面実測（1/20）。

10月1～3日　遺構検出。遺構断面実測開始（1/20）　SA-3検出。

5日　SA-1・2・4検出。SB-1発掘開始。

9～11日　SA-3発掘、床面遺物検出。調査区域内全体の平板測量（1/100）。SA-1・4断面実測（1/10）。

12日　SA-1（完掘）・SA-2（遺物出土状況）・SA-3（遺物出土状況）・SA-4（畦断面）およびSB-1写真撮影。

15日　SA-3周溝発掘、炉跡の検出。SA-3断面実測（1/20）。

16日　SA-3（遺物出土状況）写真撮影、平面実測（1/10）。

17日　調査区全面清掃。SA-3平面実測（1/10）。

18日　調査区全景写真撮影。SB-1、SA-3（完掘）写真撮影。SA-2平面実測（1/10）。遺構断面実測完了。豊中市教育委員会柳本氏立会。

19日　気球による空中写真撮影。SA-2（完掘）、SA-3炉跡写真撮影。

20～22日　SA-1平面実測（1/10）。SB-1断割り、写真撮影後実測。

23日　SA-2平面実測。SB-1柱穴断面実測（1/20）。東拡張区設定、発掘。

24～25日　東壁・北壁・西壁土層断面実測（1/20）。遺構平面実測完了。

29日　平板測量（1/100）補充。東壁・西壁・南壁・北壁土層断面実測完了。東拡張区写真撮影。

31日　東拡張区土層断面実測（1/20）。南壁断面図補充。発掘機材および出土遺物撤収。

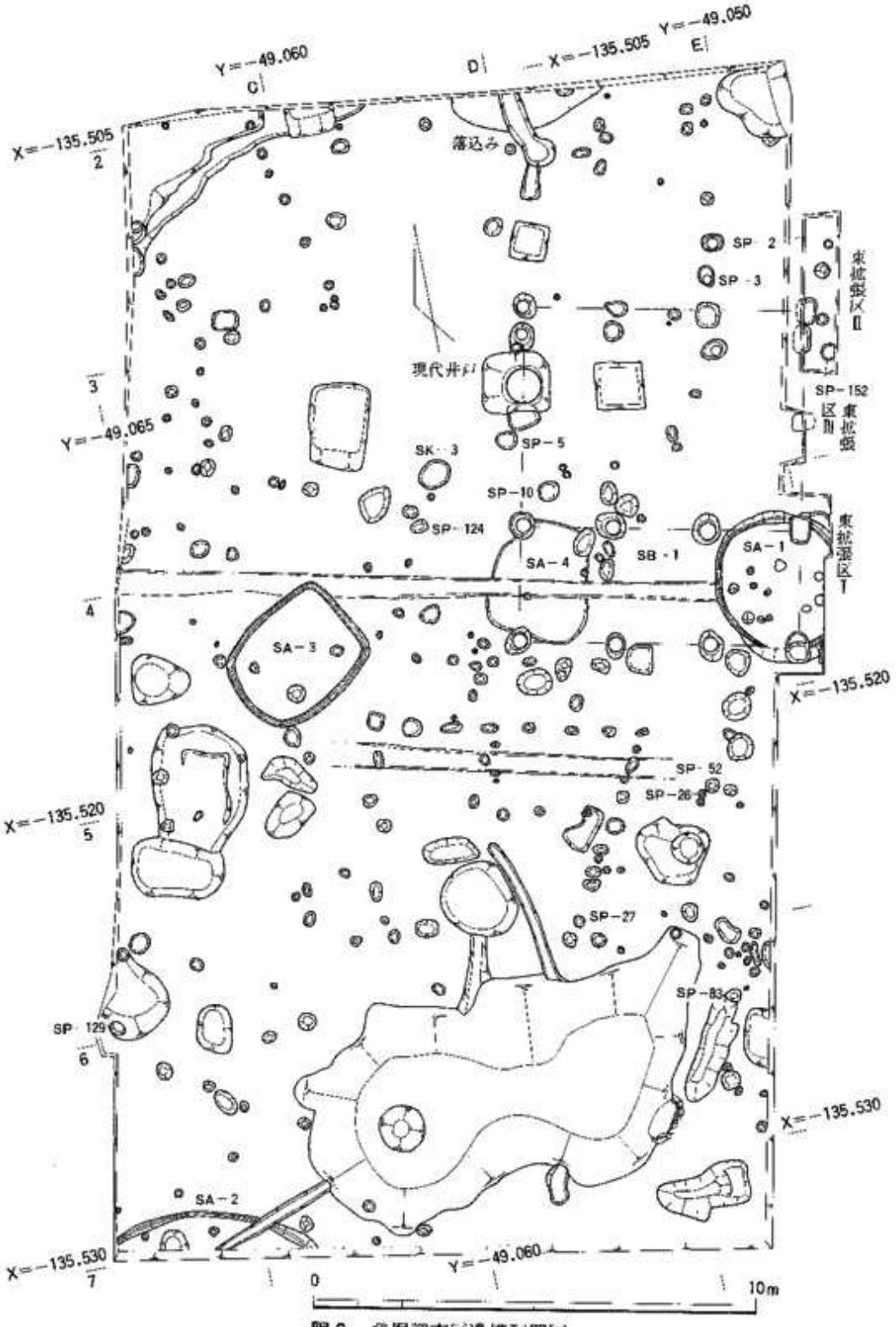


図6　発掘調査区遺構配置図

III　調査の概要

1．土　　層

調査地の基本的土層は、盛土・旧耕土・地山である。全面に30cm前後の盛土があり、その下に10～15cmの旧耕土が見られる。ただし、撹乱が地山までおよんでいるところや旧耕土がないところは、撹乱土・盛土直下に地山が露呈する。地表面から地山までの深さは40～50cmをはかり、遺物包含層はすでに削平されてまったく残っていなかった。

地山は大きく２層に分けられる。上層は小礫を少量含む暗赤褐色シルト層で、30～50cmの厚みをもって調査地全域を覆っている。調査地と同レベルにある台地全体に広がる洪積層である。下層は黄色味を増し、拳大の礫を多量に含む黄褐色砂泥礫層になる。

2．遺構と遺物

検出した遺構は、弥生時代の竪穴住居址・土壙をはじめ、掘立柱建物跡、近現代の溝状遺構や土坑・ピットなどがある。調査区の中央において東西方向に約3.5mの間隔で２本平行に走る溝状遺構は幅40cmをはかり、近代の道路遺構ではないかと思われるが、ここでは近代以降のものはさておき、竪穴住居址・掘立柱建物跡を中心に取り上げることとする。

竪穴住居址は確実なもの３棟、それらしきもの１棟を確認し、それぞれをSA-１・２・３・４とした。掘立柱建物跡１棟にはSB-１、土壙にはSK-１～、ピットにはSP-１～の番号を付した。

(1)建物遺構

SA-1（図７）

調査区の中央東縁で検出した円形の竪穴住居址である。調査査区内では西半分を検出したが、後に東側に約１m拡張し住居址の大部分を発掘した。直径は東西３m、南北3.2mをはかり、ややいびつである。残存深さは10cmほどで、残り具合はあまり良くない。住居址内をめぐる幅20cm・深さ10cmほどの周溝は南側で一部とぎれるところがあるが、そのことは南側が半月形に25cm程肩崩れしたように張り出していることと関係するのであろうか。

柱穴については当初検出した西半分のピットを発掘したが、いずれも不整形で浅く、建物の柱穴になるようなものではなかった。また、中央にある細長い落ち込みも不整形なもので住居址に関係するか否かは不明である。

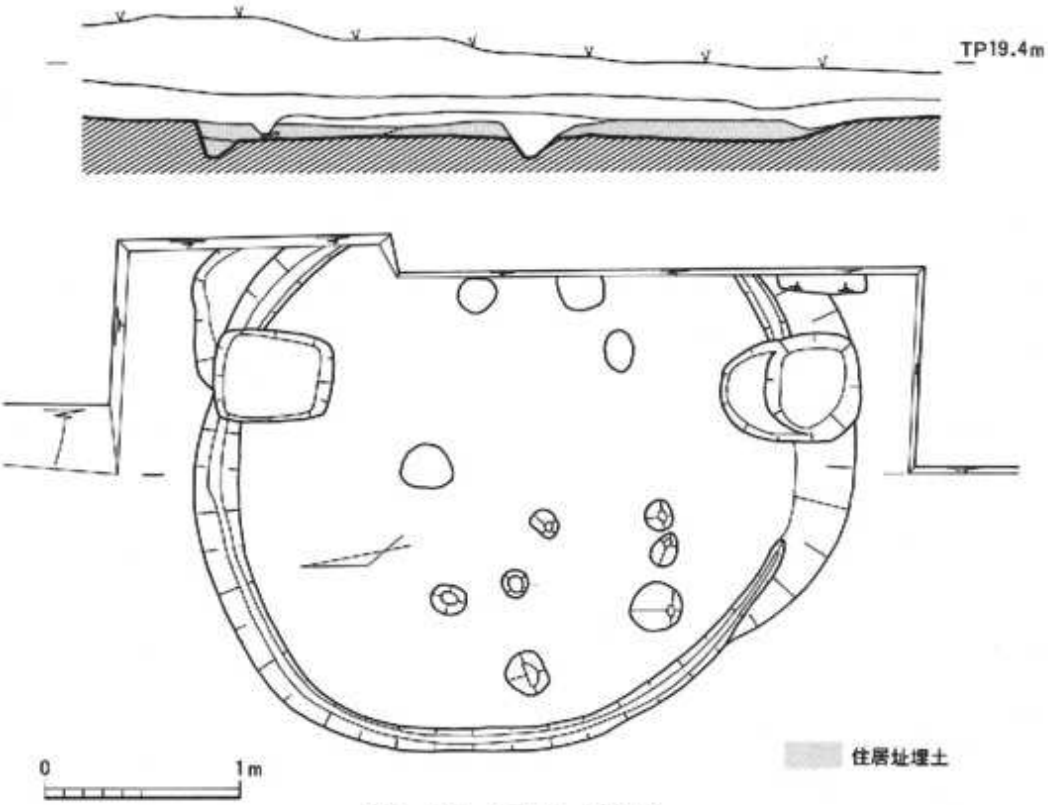


図7　SA－1平面・断面図

炉跡になるような床面が焼けたところも確認できなかった。

遺物は、住居址に伴うものはまったく無く、わずかに北側の周溝あたりの堆土から弥生土器の小片が少量出土したにすぎない。図13に図示した18は甕の底部と思われるが、保存状態が悪く、整形調整等はよく分からない。胎土の粒子は細かく、石の動きが見られないことから外面に磨き調整がなされていたものと思われる。

SA－2（図8）

調査区の西南端部において円形竪穴住居址の一部を検出し、復元直径8ｍをはかる円弧の約1/5を発掘したにすぎない。残存深さは約15cmで、池の排水用土管埋設溝によって分断されている。住居址内の壁際には幅20cmの周溝がめぐるが、非常に浅く、数cmほどしかなかった。柱穴については、深さ5～6cmのピットを2か所確認したが、建物の柱を構成するピットとは認め難いものである。他に、炉跡など住居址を構成する付属施設の痕跡は検出できなかった。

遺物についても、SA－1同様非常に少なく、図13の弥生土器底部19や壺の破片などが少量出土したにすぎない。いずれも保存状態は悪く、成形・調整等はよくわからないうえに小

破片のため、直接住居址にともなうものかどうかは不明である。

SA-4

SA-1の西3mに隅丸方形もしくは円形状に、南北2.8m・東西2.3m、深さ5cmほどの落ち込みを確認し、これをSA-4とした。この落ち込みは周辺から中央にかけて凹レンズ状になだらかに窪んでいるが、竪穴住居址の内壁周溝や柱穴・炉跡などは検出できず、積極的に住居址とする徴証は何も得られなかった。

遺物は、弥生土器の細片が2点出土したにとどまる。

SA-3（図9）

調査区中央部の西寄りで検出した竪穴住居址である。試掘の際、住居址の一端が確認されており、方形竪穴住居址の存在が予想されていた。住居址は、内側周溝がかろうじて残る程度で、周壁はほとんど失われていた。周溝から窺える住居の平面形は、全体に長方形を呈するものの、一方の短辺側の角が方形に穿たれているのに対し、他方は弧を描くように丸く掘られており、やや胴張りの長方形という特異な形態を示している。

住居址は、長辺3.05m・短辺2.55mをはかり、幅15cm・深さ10～15cmの周溝がめぐる。長辺の主軸はN56°Eで、北東から南西の方向に棟をもつ。床面は住居址の中央に向かって凹レンズ状に窪み、その深さは15cmである。中央床面はさらに浅く窪み、直径60cmの範囲が薄く焼けた上に広く灰混じりの黒色土が堆積しており、炉が設けられていたものと思われる。

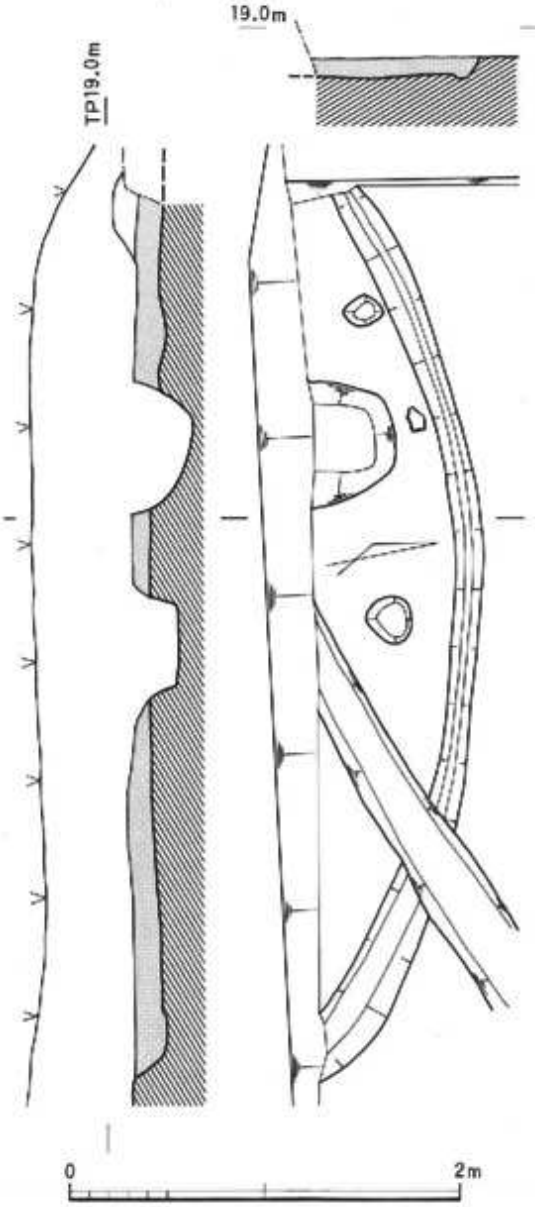


図8　SA－2平面・断面図

柱穴は住居址の南側に偏って２本検出したが、一方が直径・深さ共に40cmをはかるのに対し、他方は直径25cm・深さ15cmと小さく浅い。

遺物は、炉と２本の柱穴の周囲の床面および埋土から多数の弥生土器と石皿の残片１点を検出した。また、周溝の西コーナーから叩き石１点が出土している。整理の結果、弥生土器は６個体分に分類でき、図10に示した５点のような壺・高坏の類で占められ、ほかに

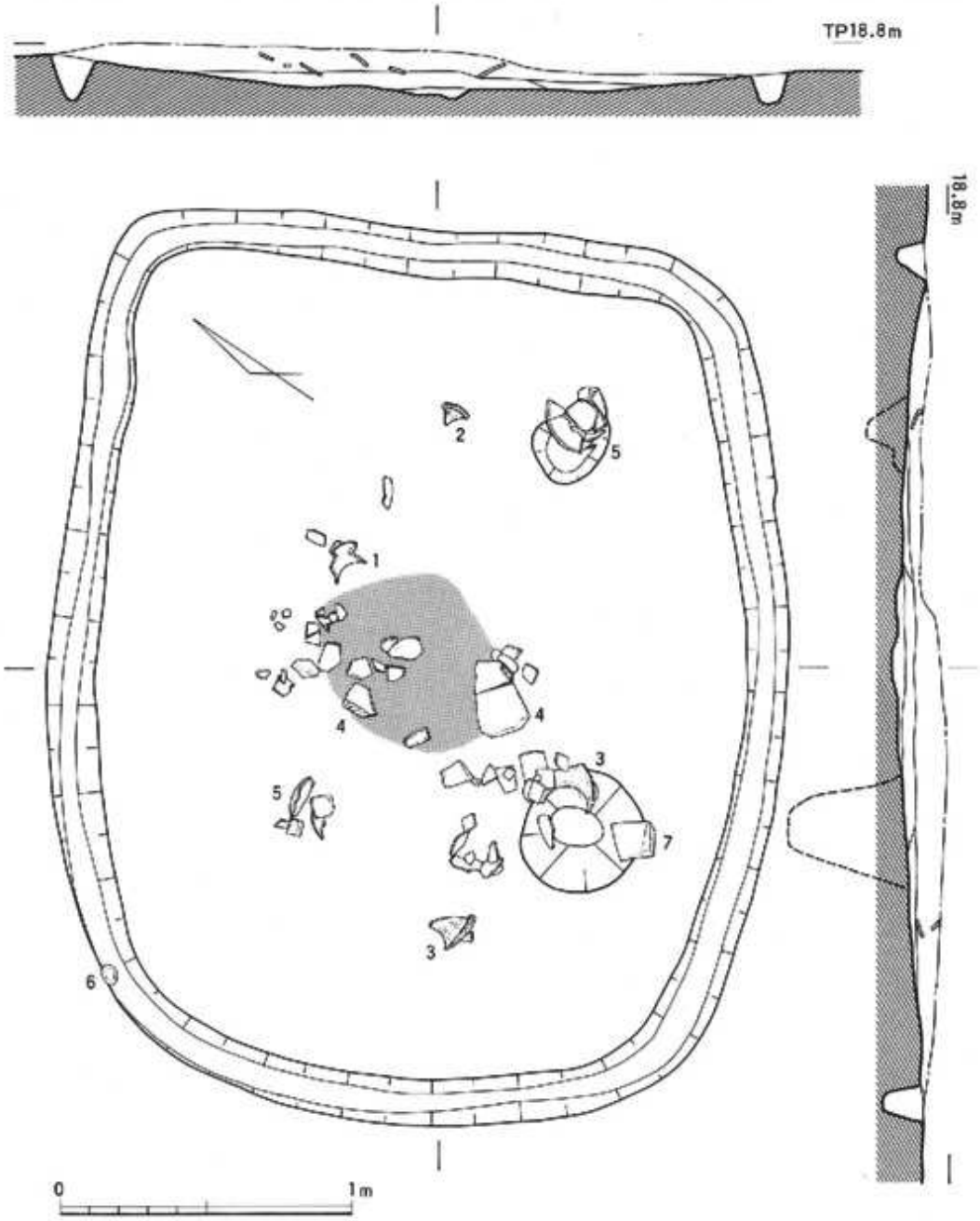


図９　SA－３平面・断面図（出土遺物番号は遺物実測図番号に一致）

水差し形土器と思われる１点があるものの、甕の類はまったく含まれていなかった。

１は壺の口縁部で、直立する頸部外面に顕著な縦ハケ調整を施し、下部には櫛描き直線紋が見られる。口縁部は水平方向に屈曲し、端部をわずかに上下に拡張させたのち、その端面に凹線紋をめぐらす。口径21.8cm・残存高5.3cmをはかる。

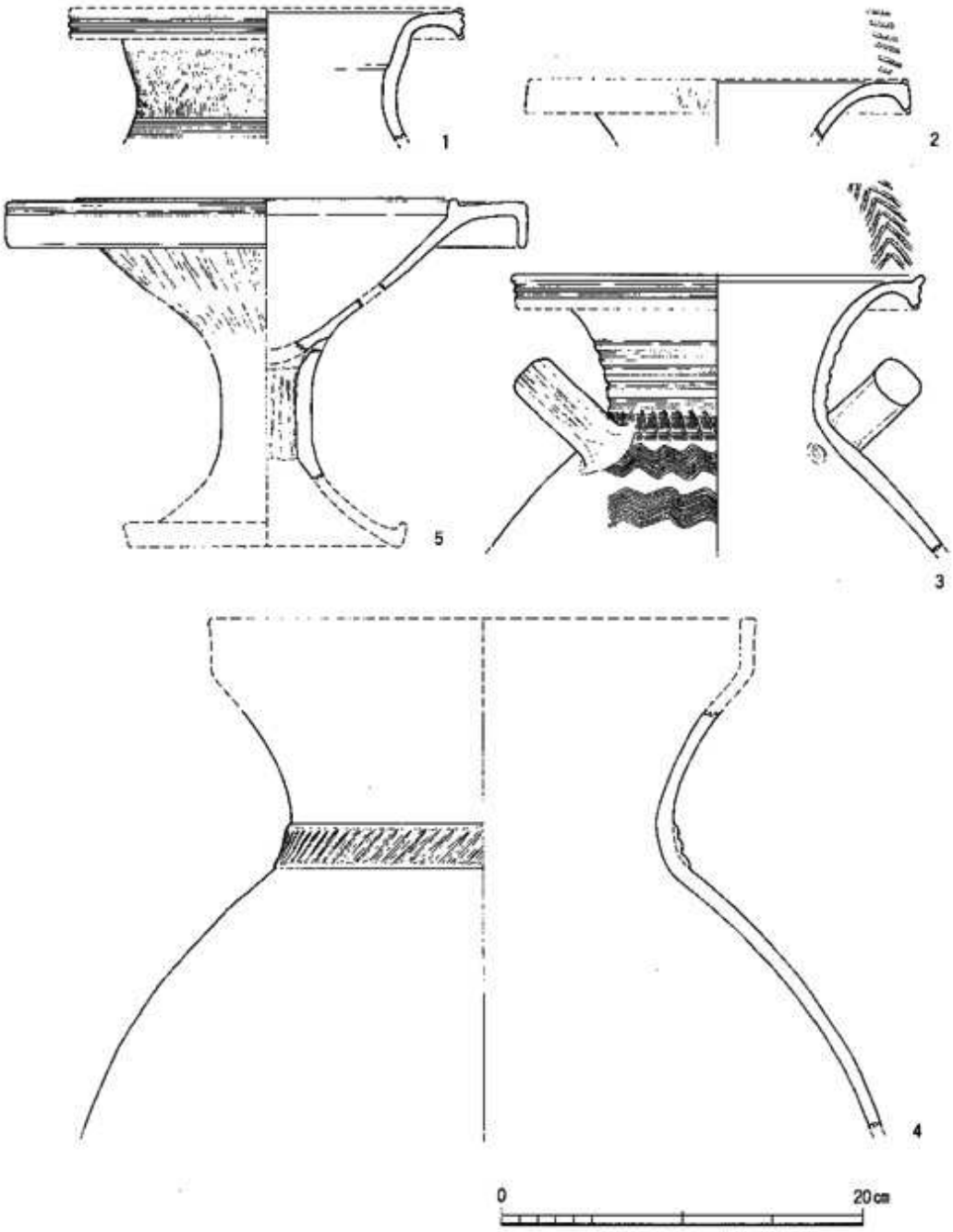


図10　SA－３出土の土器

2は、大きく外反したのち水平に開く壺口縁部であるが、保存状態が悪く、調整技法等は不明である。口縁上面に櫛描き列点紋がめぐらされており、口縁外端面には波状紋を施した痕跡がわずかに残る。口径20.8cm・残存高3.3cmである。

3は環状の把手をもつ特殊な形態の壺である。5条の凹線紋がめぐる頸部は緩やかにラッパ状に開き、口縁部は大きく水平に外反し、口縁端部は上下に拡張する。口縁外端面には2条の凹線紋を配し、上面には方向を違える二列の櫛描き列点紋を綾杉状に連ねる。体部には、頸部との境界に櫛状工具を右から左へ断続的に引いて描いた擬似簾状紋をめぐらし、その下に櫛描き波状紋を二段に配列する。この壺を特徴づけるものは体部上端の還状の把手で、体部施紋後に貼りつけられている。把手の断面はやや扁平な矩形で、上面を櫛状工具で調整してある。遺存するのは一か所だけであるが、相対する二方につけられていたものと思われる。口径22.6cm・残存高15.4cmをはかる。

4は大型の壺で、体部上半から頸部にかけて残存する。頸部と体部の境界に幅広扁平なヘラ押圧連続紋をあしらった貼り付け突帯をめぐらすが、全体に遺存状態が悪く、内外面の調整等はよくわからない。口縁部は、外反する頸部から屈曲して直立するいわゆる有段口縁になるものと思われる。頸部径21.4cm・残存高23.3cmをはかる。

5は水平口縁をもつ高坏である。脚裾部を除く各部があるが、遺存状態が悪く、全体を

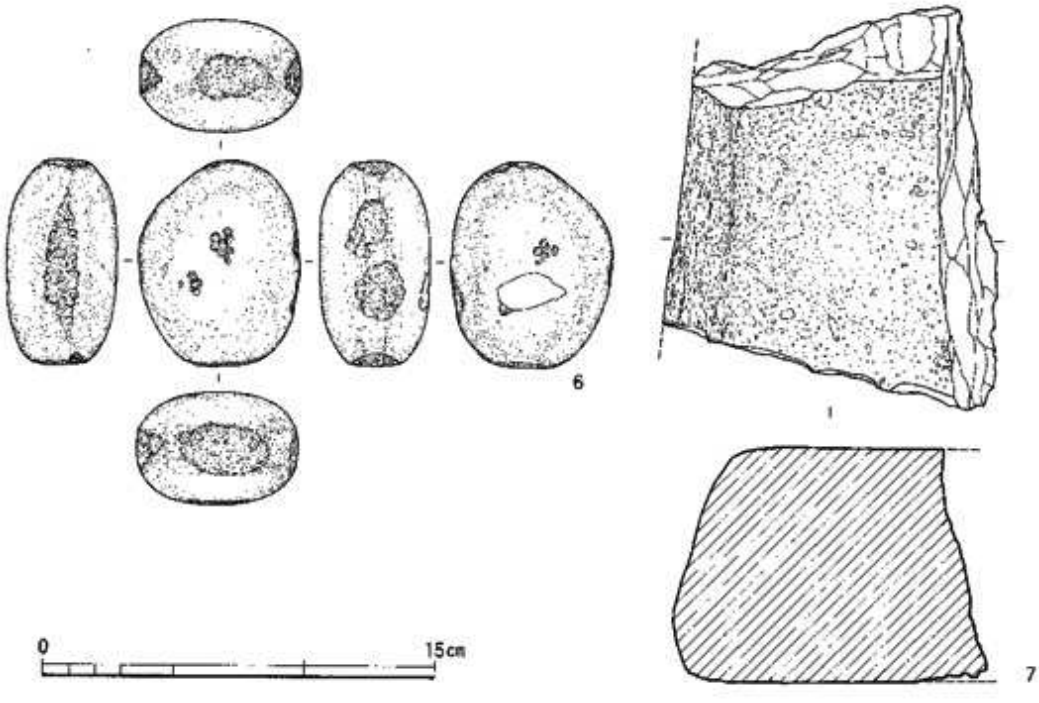


図11　SA－3出土の石器類

接合復元することは困難である。口縁部は上面に突帯をめぐらし、幅広い水平部から端部を直角に垂下させる。口縁外端面の上部に幅の狭い凹線紋が一条めぐる。体部はかなり深めで、外面はていねいなヘラ磨き調整が施されている。口縁径29.0cmをはかり、推定器高は19cmである。

6（図11）は叩き石で、長径7.9cm・短径6.2cm・厚さ4.2cmの扁球形を呈する。表面平滑な河原石を利用し、四側面すべてに敲打痕が認められる。両平面にも先のとがったようなものを叩いた痕跡が見られ、石のすべての面を使用している。石材は、流理構造のみられる白色系の流紋岩である。

7（図11）は厚さ9cmをはかり、石皿の断片と思われる。作業用の台石に再利用されたのであろうか、三方が截断され、15cm×12cmの台形状を呈する。図示した上面にわずかに擦り込んだ使用痕が認められる。石材は、火を受けて赤変した部分もみられるが、全体に白っぽい褐色を呈し、西摂北部山中に広がる有馬層群によくみられる溶結凝灰岩である。

SB-1（図12）

調査区の北東部で検出した掘立柱建物跡である。[1] 南北3間（7.6m）×東西3間（6.3m）を確認したが、東側が調査区外に伸びて東西4間以上になるかもしれない。柱穴には方形のものや円形のものがみられ、形状は一定しないが、50～60cm大の掘り方に20～30cmの柱痕が認められた。深さは20～40cmである。柱穴列の方向はN12°Eをはかる。柱穴の配列から南側に庇をもち、東西に桁行3間（6.3m）・南北に梁行2間（5m）をもつ建物と考えられる。なお、北辺の柱穴が2列接して並ぶが、建替えによるものであろうか。

建物を構成する柱穴からは弥生土器の小破片が少量出土している。図示し得るものとしては図13の甕の口縁部16と壺と思われる底部17があるが、いずれも細片のうえ摩耗激しく成形調整等はよくわからない。また、生駒西麓産の胎土の土器片1点が出土している。土器の年代観は竪穴住居址とあまり時期差のないものに限られているようで、遺物から前後関係を決めることは困難である。ただ、SA-1・SA-4の竪穴住居址と柱穴が切り合い関係にあり、2棟の竪穴住居址を切り込んでいるところからSA-1・4より新しく位置付けられる。

しかし、柱間の間隔を尺に置き換えて計算してみると、母屋の桁行きが21尺・梁行きが17尺・庇を含めた南北の長さが25尺となる。尺で割り切れる建物であることに加えて、建物がさらに東に伸びてかなり大きなものになるかもしれず、その規模や構造などを考えてみれば、7～8世紀頃の建物になる可能性が高いことも捨て切れない。今後の課題として付記しておく。

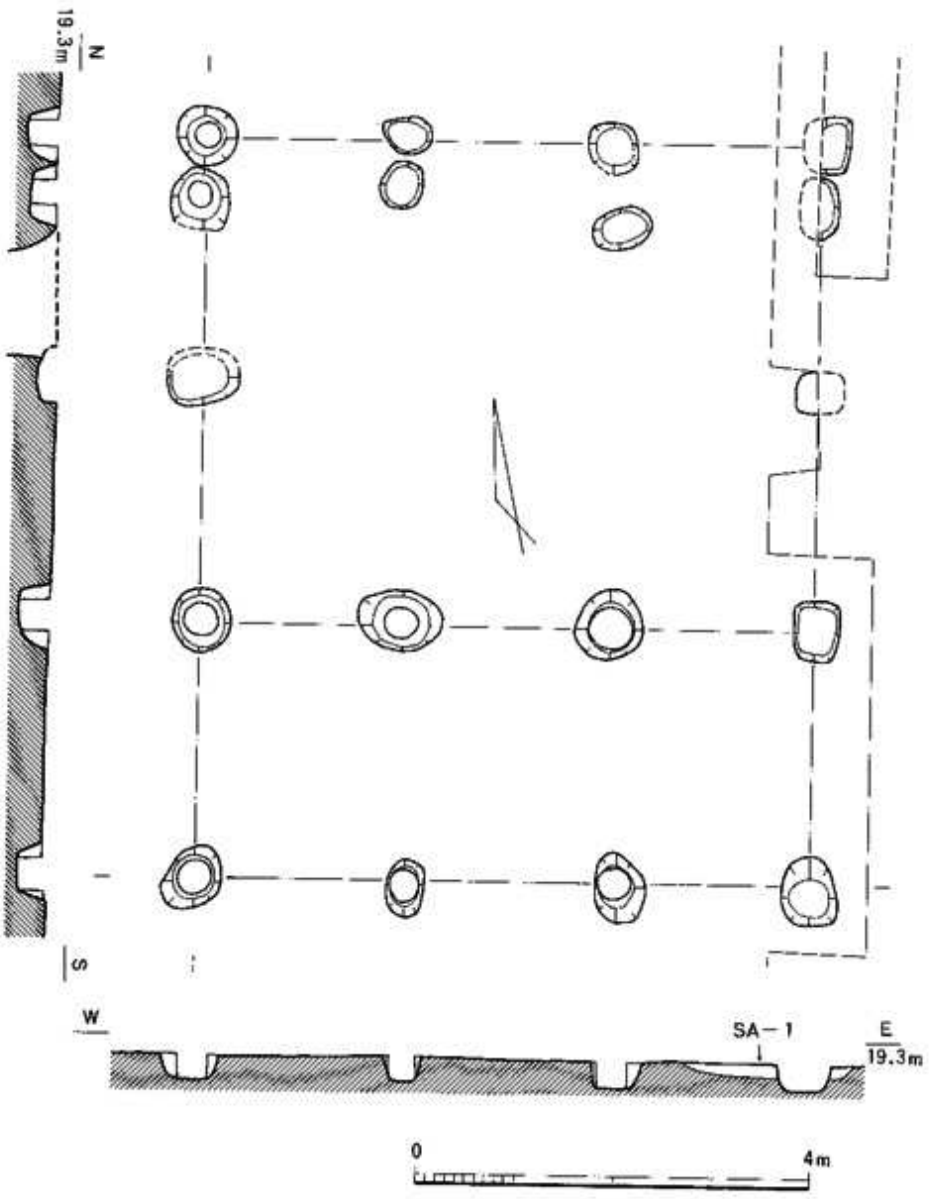


図12　SB－1平面・断面図

(2)ピットと土坑

建物に組み合わない単発のピット（SP）と土坑（SK）のうち、弥生土器が出土したものをあげると次のとおりである。

SP-2・3・5・10・26・27・52・83・124・129・152

SK-3

遺物は、一部を除いて細片が少量出土した程度で、図示しえるものは少ない。次にその主なものを取り上げておく。

SP-2

調査区の東北地区から検出した40cm×50cmの楕円形のピットである。高坏・壺などの破片数点が出土した。

13（図13）は高坏の口縁部と思われる。器壁が薄く、外面に3条の凹線紋をめぐらす。口径23.2cm・残存高3.9cmをはかる。

SP-5

SA-4の北2mで検出した50cm×45cmの円形ピットである。深さは20cm足らずであるが、多数の弥生土器が出土した。出土遺物には図13に図示した壺8や高坏9・10のほかに水差し形土器の把手なども含まれている。

8は壺の口縁である。緩やかに外彎する頸部から口縁部を大きく屈曲させて上面を水平にし、端部を上下に拡張して外端面をつくる。上面に櫛描き列点紋、外端面に櫛描き波状紋を配し、頸部下部に櫛描き直線紋をめぐらしている。頸部から胴部にかけて、おそらく直線紋・波状紋などの櫛描き紋を連ねていたのであろう。

9は高坏の口縁部で、断面逆L字状の縁帯の一部が残るのみである。口縁径26.4cm。

10は高坏の坏部と脚部の境界部分である。摩耗が激しく、かつ小片のため成形調整技法は不明である。胎土や色調の違いから9とは別個体と思われる。

SP-10

SA-4の北0.5mで検出した60cm×50cmの円形土坑である。深さ15cmで船底形を呈し、SP-5同様弥生土器を多く包含していた。SP-5との間隔は1.5mをはかる。図13に図示した土器14のほかに外面をていねいにヘラ磨きした壺や、幅広のタタキをもつ大型品の破片などが混じっていた。

14は極小片のため器形の特定は難しいが、高坏か鉢の口縁部と思われる。口縁直下の内

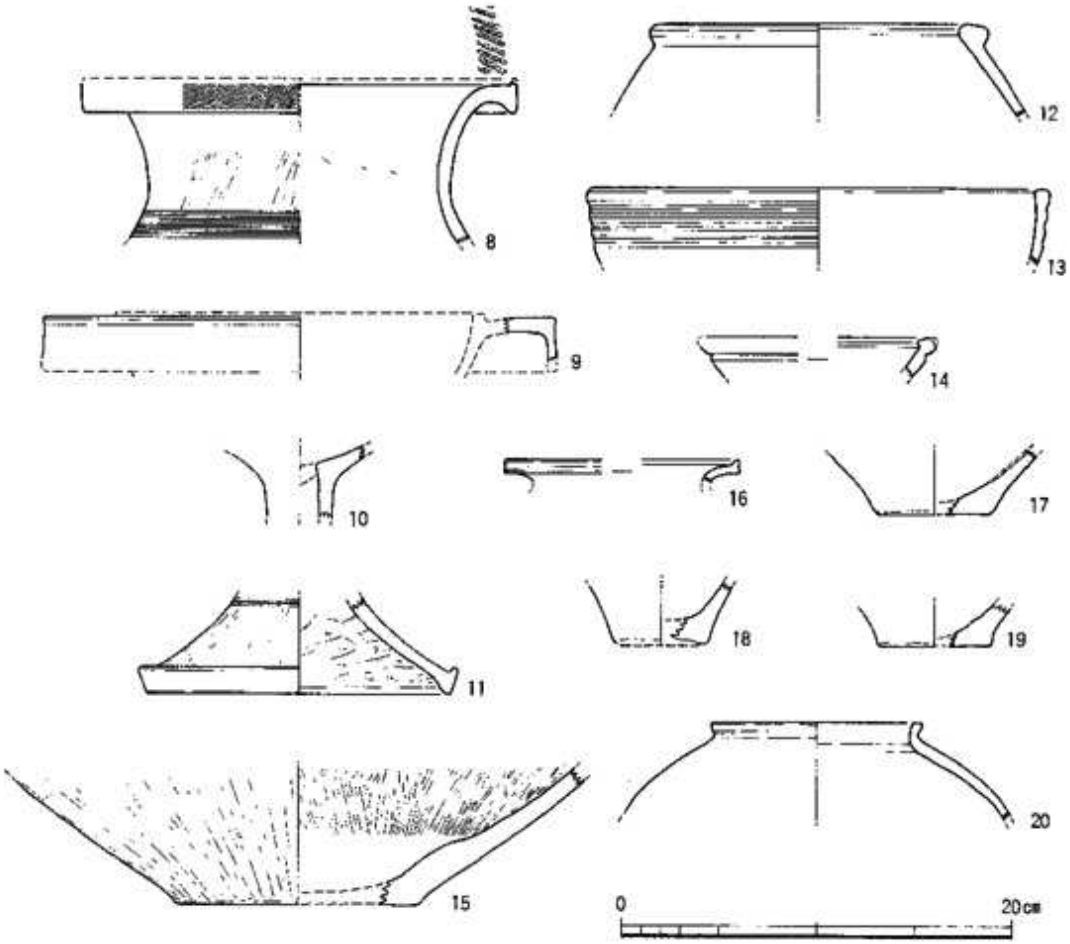


図13 SP－5（8～10）、SP－26(11)、SP－152(12)、SP－2（13）、SP－10(14)、SP－27(15)、SB－1（16・17）、SA－1（18）、SA－2（19）、その他(20)出土遺物

外面に深い抉りと凹線をあしらい、口縁部をかなり意識したつくりである。

SP-26

調査区の南東地区から検出した直径17cmほどの小ピットである。高坏・壺の破片が出土した。

11（図13）は高坏の脚部で、裾端部を拡張し外傾する外端面をもつ。内面は全体に横ないし斜方向にヘラ削りされ、外面は縦方向にていねいにヘラ磨きされている。脚中央部にはヘラ描き沈線が2条観察される。脚径16.3cm・残存高4.9cmをはかる。

SP-27

調査区の南東地区から検出した直径25cmのピットで、壺など数点の破片が出土した。

15（図13）は大型の壺の底部と思われる。外面には縦方向のヘラ磨きが施され、内面には底から少し上がったところから上にハケ調整が縦方向に施されている。底径12.4cm・残存高7.1cmである。

SP-152

東拡張区IIから検出した直径35cm・深さ45cmのピットで壺類の破片数点が出土した。

12（図13）は無頸壺の口縁部である。口縁端部を外側に肥厚させて、いわゆる段状に口縁を形成する。摩耗激しく調整等は不明で、口径15.0cm・残存高4.7cmをはかる

(3)そ の 他

調査区の北辺中央部にごく浅い落ち込みがあり、埋土から須恵器20（図13）が1点出土した。須恵器は耕土・撹乱土壙などから若干量出土しているが、実測し得たのはこの1点のみである。成形が極めてていねいで、滑らかなカーブをなす体部と、低く上方へ屈曲してシャープな端面をつくる口縁部が特徴的である。焼成は極めて良好で、口径10.8・残存高5.0cmをはかる。おそらく奈良時代以降、平安時代前期にくだるものであろう。

註 (1) SB-1については、文化庁建造物課　宮本長二郎氏の教示を得た。

Ⅳ まとめ

岡町北における台地縁辺の発掘調査は、早くに個人住宅化が進み、再開発や大規模建築物として建替えなどの計画が少ないこともあって、あまり行われていないようである。そのため、遺跡の分布範囲や具体的内容が十分に把握されていない地域である。ただし、岡町北から桜塚にかけての豊中台地上には、大石塚・小石塚・大塚・御獅子塚・南天平塚など36基以上の前方後円墳や大円墳で構成される桜塚古墳群が形成されており、当該地が同古墳群の西端域の一角に位置していることからみても、遺跡の存在は充分に予測された。試掘調査により遺跡の存在が確認され、発掘調査により弥生時代の集落遺跡が明らかになった。以下に遺跡の概要と問題点をまとめておこう。

発掘調査の結果、弥生時代の確実な竪穴住居址３棟と掘立柱建物跡１棟を検出した。竪穴住居址の内訳は、直径３ｍの小型円型住居址（SA-１）・直径８ｍ大と思われる大型円形住居址（SA-２）・長辺３ｍの小型長方形住居址（SA-３）がそれぞれ１棟ずつであった。掘立柱建物（SB-１）は桁行３間×梁行２間に庇が南側にとりつく。遺物は、SA-３から住居址にともなう一括遺物を検出した程度で、ほかの住居址からはそれにともなう遺物は検出できなかった。さらに当該地は、後世の削平・攪乱を受け、遺跡存続時期を知る手懸かりとなる遺物包含層が失われており、遺跡の残存状況は必ずしも良いとはいえないが、さいわい出土遺物をみるかぎりあまり時期差のないもので占められているようである。

弥生土器は壺がもっとも多く、ついで高坏が続く。壺の口縁部は大きく屈曲して上面が水平になるようにつくられ、壺や高坏の口縁部には凹線紋がめぐらされ、壺の頸部から肩部にかけては凹線紋・櫛描き直線紋・波状紋などが施されてある。大型壺の頸部と体部の境界にはヘラ押圧の突帯が貼り付けられ、高坏口縁の縁帯部はＬ字状に垂下している。こうした諸特徴から土器の年代を畿内第４様式の範疇の中でとらえることができ、弥生時代中期後半の一時期、ここに集落が形成されたとみることができよう。

つぎに、SA-３出土の弥生土器は６個体分あり、その器種構成は壺４点・高坏１点のほかに水差し形土器１点が含まれていたようである。壺４点の中には大型のもの１点が含まれる。しかし、日常欠かすことのできない甕が含まれていない。調査地全体をみても甕の絶対量の少なさが目につく。遺跡全体をとおして甕の量的な問題をこの段階で取り扱うことはできないが、ここではSA-３の住居の形態や大きさに対して遺物のあり方が特異であるという事実のみを指摘しておく。

このように、今回発掘した地点は住居の形態や遺物のあり方などから鑑みて、集落の中

でも特殊な場所にあたる可能性が高く、この部分をもって集落遺跡としての一般的な形態を論じることはできない。今後、当該地区の発掘調査が進めば、遺跡の範囲や性格などがより鮮明にされていくであろう。

付記

発掘調査終了後、工事着手が延期され、現場はそのまま放置されていた。たまたま、近くの新免遺跡で発掘調査する機会があり、施主の了解のもと、1991年5月23日にSB-1の柱穴確認の補充調査を行った。SB-1の東辺の柱穴は、東拡張I・IIで一部確認済みであったが、さらに確実なものにするため、東拡張区のIを拡大し、東拡張区IIIを設定した。その結果、東拡張区IIIにてSB-1の柱穴と思われるピットを確認するとともに、結果的にSA-1の大半を発掘することができた。ただし、この時検出したSA-1・SB-1のピットは輪郭を確認するにとどめ発掘しなかった。(図14)

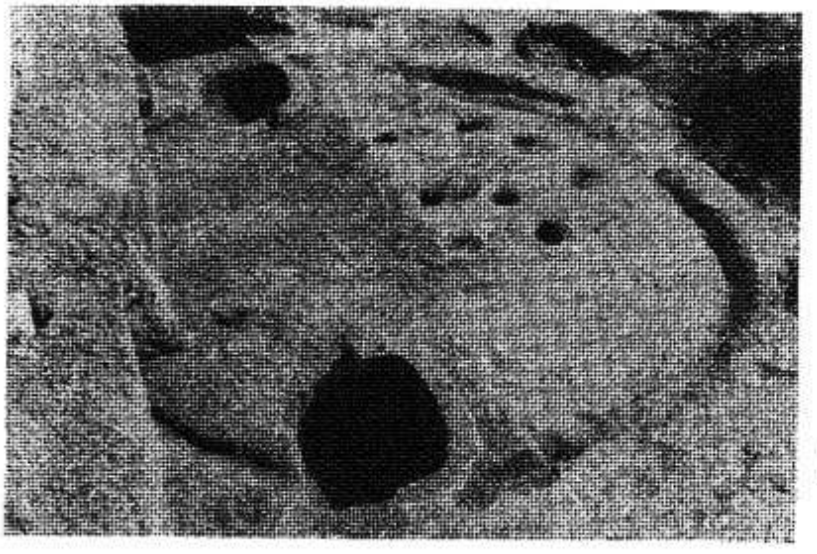
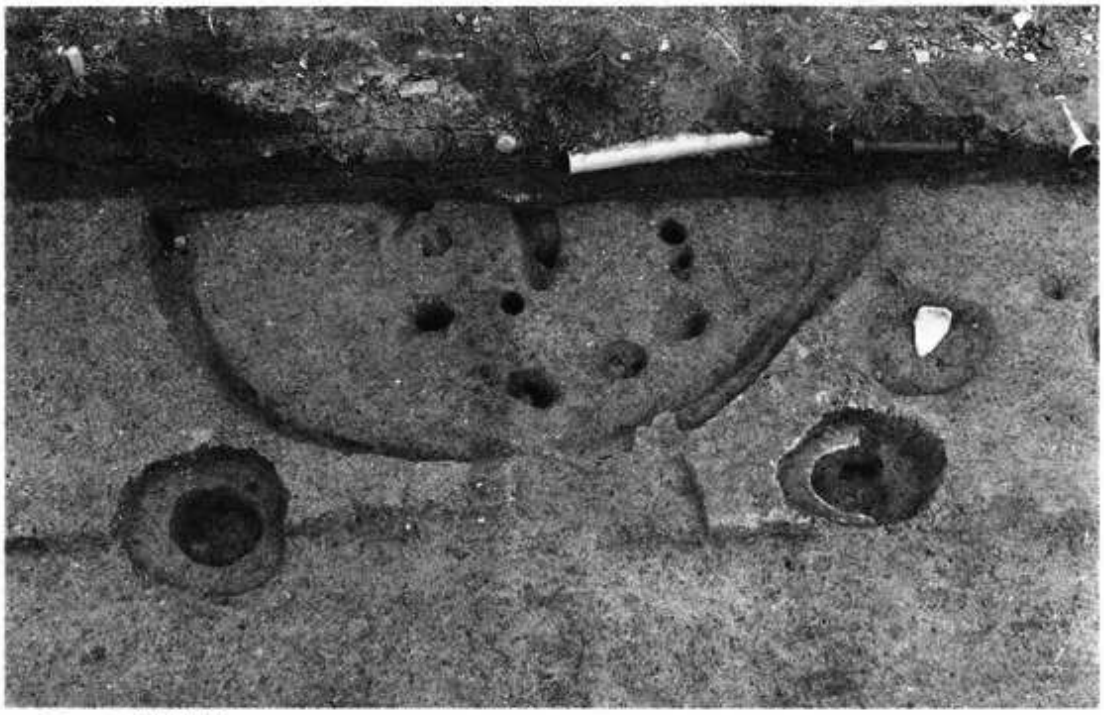


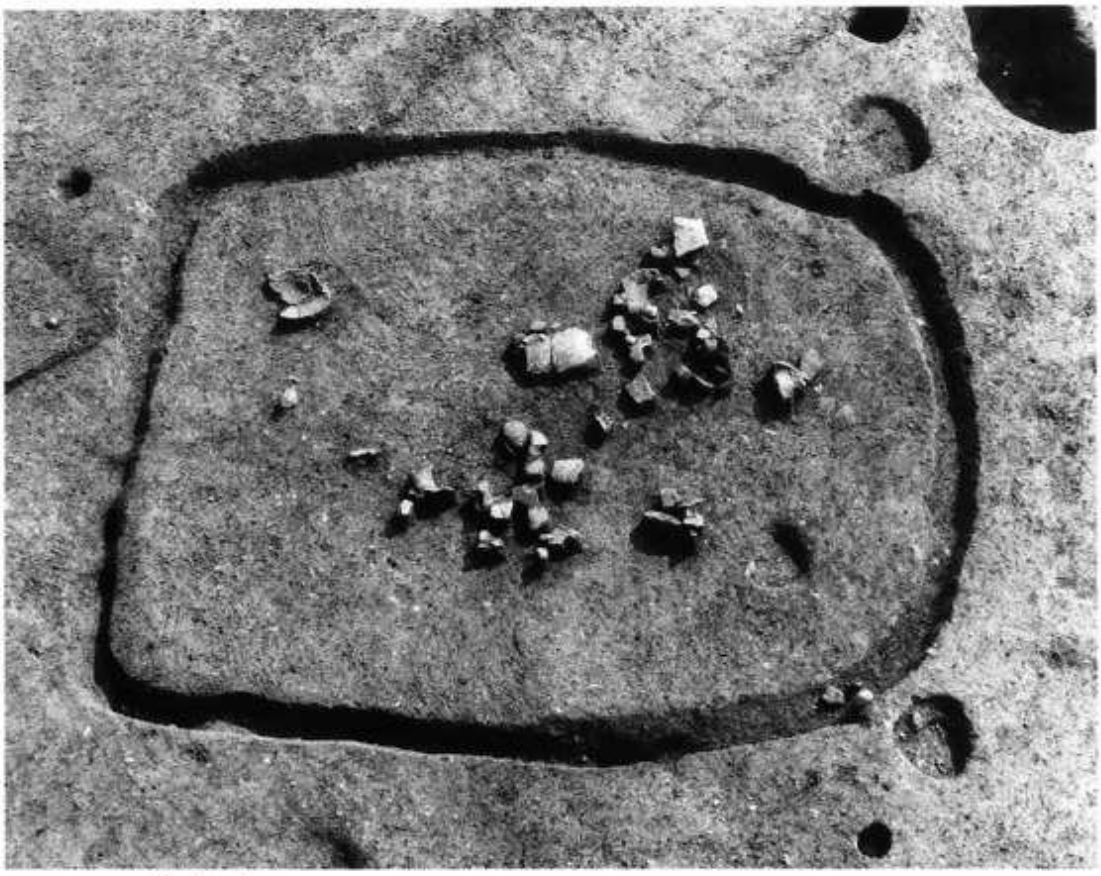
図14
SA－1拡張後の状況写真

図　　版

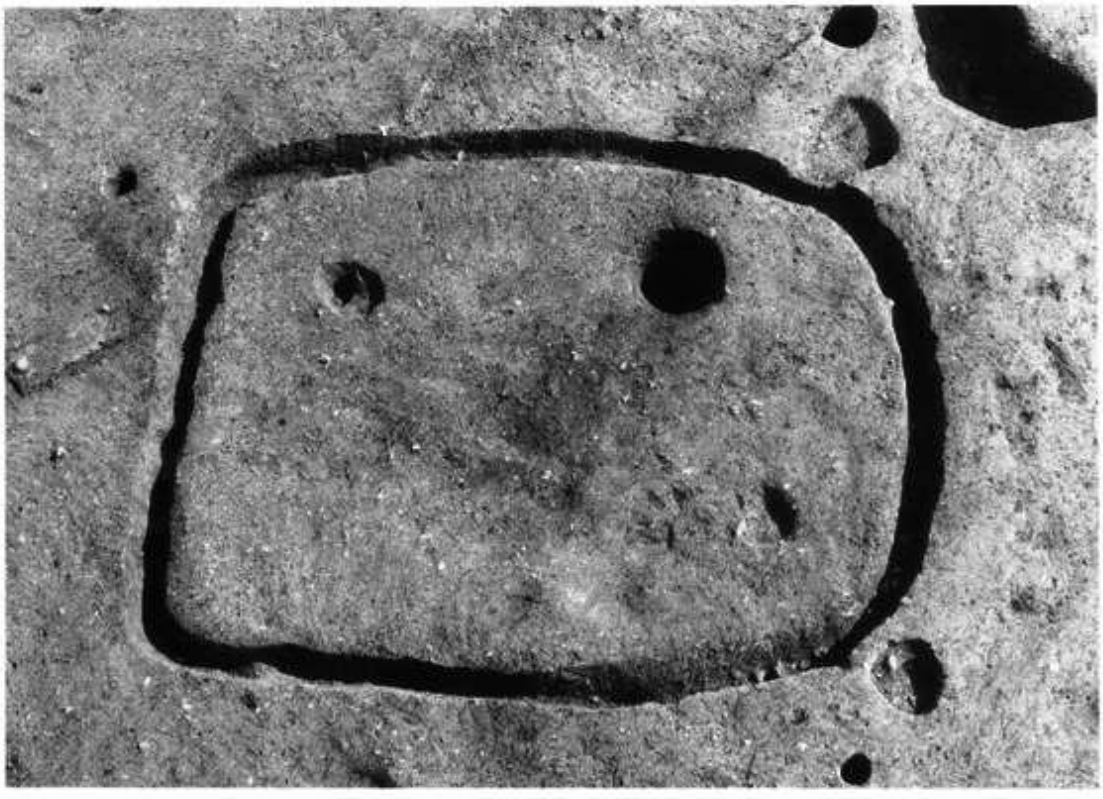
発掘調査区全景



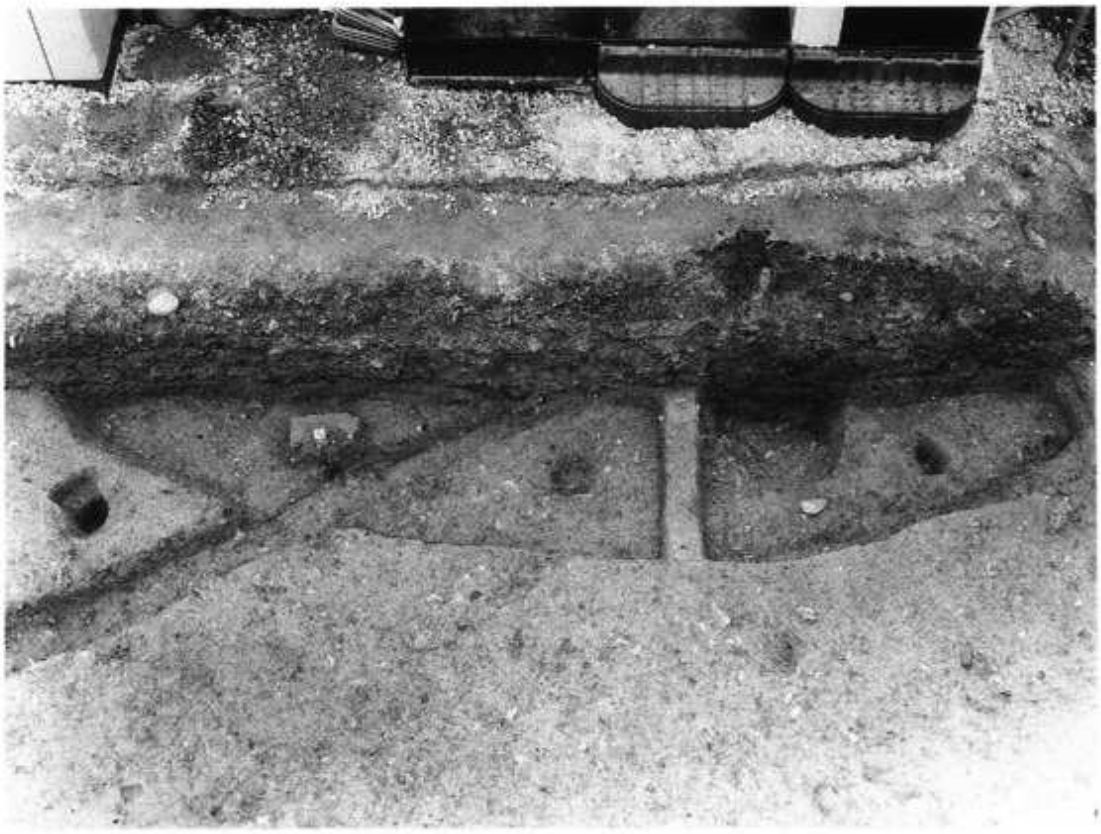
SA－1 発掘状況



SA－3遺物出土状況



SA－3完掘状況



SA－2 発掘状況

SB－1 発掘状況

3

SA－3出土遺物

3

SA－3出土遺物

8

4

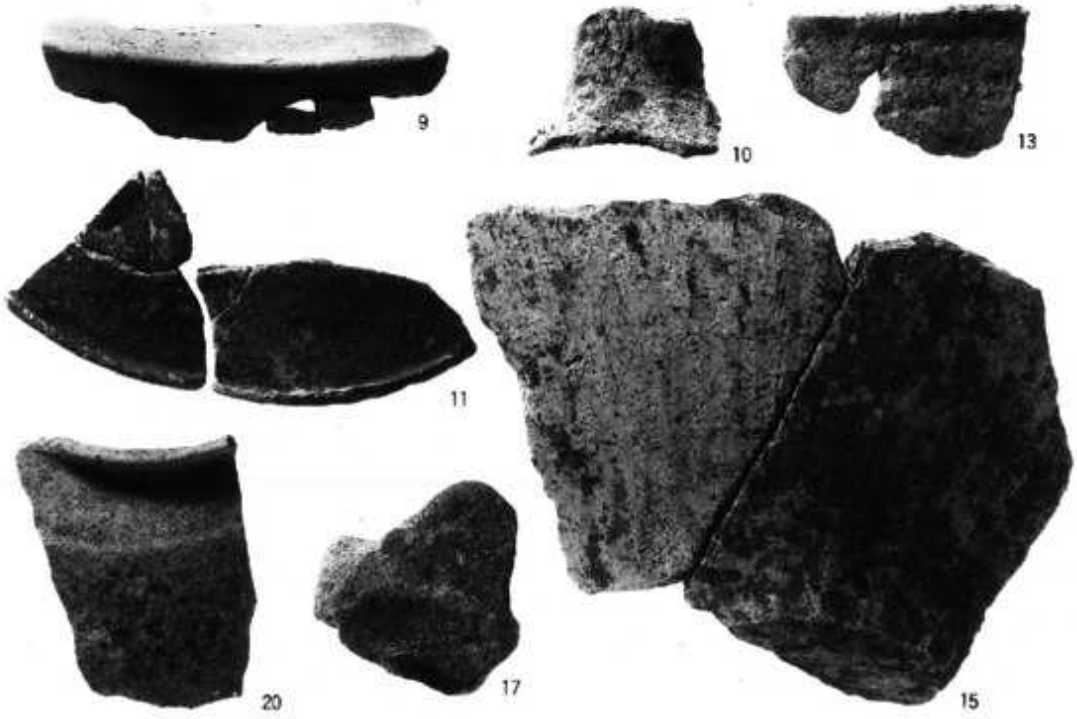
7

1

6

SP－5出土遺物(8)，SA－3出土遺物(1·4·6·7)

SA－3出土遺物



SP－5出土遺物(9･10)，SP－26出土遺物(11)，SP－2出土遺物(13)，
SP－27出土遺物(15)，SB－1出土遺物(17)，落込み出土遺物(20)

豊中市　岡町北遺跡 --第3次調査—

1993年3月31日発行

編　集　六甲山麓遺跡調査会

発　行　〒662 西宮市田中町4-23-401
TEL (0798)22-3627

印　刷　真　陽　社
〒600 京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL (075)351-6034